Y16a　緯度観測所第3代所長・池田徹郎が提案した新しい女性所員の働き方

馬場幸栄（一橋大学）

かつて日本では女性は結婚したら夫を支えるため仕事を辞めて家事・育児に専念すべきだという考えを持っている人が珍しくなかった。しかし国立天文台前身組織のひとつである緯度観測所の第3代所長・池田徹郎は、女性所員たちに対して結婚・妊娠・出産後も緯度観測所での仕事を続けるべきであると主張していた。京都帝大を卒業し、大正11年に緯度観測所の技師となった池田は、昭和18年に所長事務取扱（のちに第3代所長）に就任する。戦前から池田のもとで計算係として勤務していたある女性所員は、戦後しばらくして結婚を機に退職を申し出るが、仕事を続けるべきだと池田に引き留められ、出産の2か月前まで緯度観測所での勤務を続けている。その後4人の子を育てることになった彼女が緯度観測所に復職することはなかったが、池田からは子どもを育てながら緯度観測所での仕事を続ければよいと言われていたそうである。具体的には、「姉や」に子守をさせて勤務を続ければよい、というのが池田の主張だった。「姉や」というのは子守や家事を担う若い女中のことである。当時の緯度観測所では、子どものいる技師は姉やを雇うのが一般的であり、観測所の敷地内にある官舎では姉やたちが技師の子どもたちの世話をしていた。ただし、この池田の提案は女性所員たちにとって現実的なものではなかった。なぜなら女性所員たちの給料は技師たちの給料よりもはるかに少なく、とても姉やを雇えるような経済的余裕がなかったためである。とは言え、女性所員たちは結婚・妊娠・出産後も緯度観測所での勤務を続けるべきだと主張し、それを部分的にでも実現させた池田の所長としての判断は、当時としては先駆的なものだったと評価するべきだろう。当時の女性所員の証言や緯度観測所の記録をもとに、池田の提案した緯度観測所における新しい女性の働き方や当時の女性所員たちの状況を明らかにしてゆく。